

文化財 ニュース

16 2018



戊辰戦争風刺画（部分）



千代田区立日比谷図書文化館特別展

江戸から東京へ

江戸城無血開城から東京の新たな幕開け 開催

明治維新以降、日本は近代国家の建設を目指し、現代につながる基本的な形を築き上げてきました。それは、国家体制をはじめ技術革新と産業化の推進、教育制度、まちづくりなど多岐にわたります。

千代田区には、江戸城をはじめ、桜田門外の変が発生した外桜田門、近代化の象徴である鹿鳴館^{ろくめいかん}など幕末から明治維新にかけての歴史の舞台が数多くあります。

平成30年（2018）は明治維新150年にあたることから、千代田区立日比谷図書文化館では特別展「江戸から東京へ」を開催します。この展示では、幕末の黒船来航以降の幕末動乱から江戸城無血開城、鹿鳴館時代と言われる明治10年代までの時代を取り上げます。

江戸から東京への街並みの変化や社会の仕組み、経済、文化の発展に元幕臣が果たした役割など、今まであまり知られてこなかった明治維新像を紹介します。

会期：平成30年10月5日（金）～12月2日（日）

*10月15日（月）、11月19日（月）は休館

会期中、一部展示替えがあります。

開館時間：月～金曜 午前10時～午後8時

土曜 午前10時～午後7時

日・祝 午前10時～午後5時

会場：千代田区立日比谷図書文化館 1階 特別展示室

一般300円、大学・高校生200円

千代田区民・中学生以下、障害者手帳をお持ちの方および付添の方一名は無料

*住所が確認できるもの、学生証、障害者手帳をお持ちください。

東京桜田門之図（東京大学史料編纂所蔵）

展示解説

期間中、本展監修者による展示解説を行います。

各回30分程度、事前申込不要、無料（特別展の当日利用券が必要）

10月28日（日）午後4時から

10月30日（火）、11月13日（火）、11月27日（火）午後6時から

主催：千代田区立日比谷図書文化館／文化財事務局
協力：徳川記念財団、日本カメラ博物館

江戸から東京へ

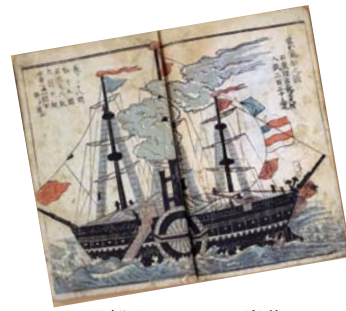
江戸城無血開城から東京の新たな幕開け

I. ゆれる江戸幕府

江戸時代後半になると、江戸の人口は100万人を超え、周辺の町々を取り込んで拡大していきます。そうした中、嘉永6年（1853）にペリー提督率いるアメリカ艦隊が江戸湾に来航し、開国を迫りました。翌年、幕府は米国の要求を受け入れ、日米和親条約を結びました。

幕府は国防充実のため江戸湾などに台場を築き、銃や大砲の増強を図りました。水戸藩を中心として攘夷論が広まり、激動の時代となっていきます。

当時、幕府内は13代将軍・徳川家定の後継をめぐり、徳川慶福（後の家茂）を推す「南紀派」、徳川慶喜を推す「一橋派」に分裂していました。近江彦根藩主の井伊直弼が大老に就任すると慶福が後継となります。



黒船とペリーの肖像
『亜米利加雑記』



桜田事変 『新撰東京名所図会』

また、黒船来航以降の対外交渉においては、孝明天皇による勅許がないまま、日米修好通商条約をはじめとする五か国条約調印に踏み切りました。水戸藩を中心とする一橋派は激しく反発し、井伊はそれに対し安政の大獄と呼ばれる粛正を実施しました。安政の大獄を不服とする水戸藩浪士らは、安政7年（1860）3月3日、登城する途中の井伊を桜田門前で襲撃し殺害しました。

これ以降幕府の権威は大きく失墜し、尊王攘夷運動が激化していきます。

II. 江戸城から皇居へ

幕府と朝廷の緊張が高まったため、幕府は融和策として皇女の降嫁を画策し、文久元年（1861）和宮が14代将軍・徳川家茂に嫁ぎました。

慶応2年（1866）に家茂が死去すると、徳川慶喜が15代将軍となります。薩摩と長州は倒幕を目指し、また公武合体の立場をとる土佐藩は、慶喜に朝廷への政権返上を働きかけます。そして、慶応3年（1867）11月、二条城で大政奉還が行われ、12月には王政復古の大号令が発せられました。

しかし、慶応4年（1868）1月、鳥羽伏見の戦いをきっかけに戊辰戦争が始まります。慶喜が江戸に敗走すると、薩長中心の新政府軍は東征軍を組織し、江戸への進攻を企てます。薩摩から将軍家へ嫁いだ天璋院と、和宮（静寛院宮）は島津家や朝廷に対し、徳川家救済と慶喜の助命を嘆願しました。

4月、新政府軍の江戸城総攻撃を前に、旧幕臣の勝海舟と東征軍参謀西郷隆盛の会談が三田の薩摩藩邸で行われ、江戸城の無血開城が取り決められます。江戸の街は戦禍を免れました。明治天皇が京都から江戸城に入城し、10月に東京城と改称されました。



忠臣蔵九段目かけあいせりふ

混乱する世相を反映し、子どもたちの姿や歌舞伎の場面などに見立てた様々な戊辰戦争風刺錦絵が描かれた。



泥絵（左：なべ嶋、右：霞ヶ関 個人蔵）

泥絵は、精製度の低い顔料と胡粉を混ぜた泥絵具で描かれており、不透明で重い質感から名が付いた。江戸後期から幕末にかけて上方と江戸で流行した。江戸系の泥絵では、大名屋敷を画題としているものが多いと見られる。



左：天璋院篤姫肖像（徳川記念財団蔵）

島津忠剛^{ただたけ}の長女として生まれ、薩摩藩主・島津斉彬^{なりあきら}の養女となった後、右大臣・近衛忠熙^{ただひろ}の養女に迎えられる。安政3年（1856）11月に第13代将軍・徳川家定の正室となった。

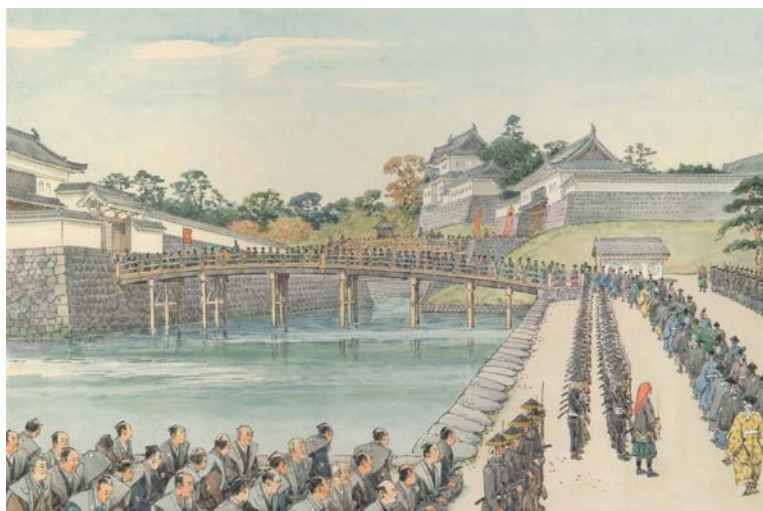
右：和宮（静寛院宮）肖像（徳川記念財団蔵）

仁孝天皇^{にんこう}の第8女として生まれ、有栖川宮熾仁親王^{ありすがわのみやたるひと}と婚約するが、文久2年（1862）に幕府からの要請で第14代将軍・家茂に嫁いだ。



開城直後の江戸城中之門 『旧江戸城写真帖』（東京国立博物館蔵）

江戸城は、幕末に主要な御殿が次々と焼失した。明治維新の際に残っていたのは、財政難のため簡略な「仮御殿」として元治元年（1864）に再建された西丸御殿^{にがわのりたね}だけであった。江戸城の古写真は、太政官の役人・蛸川式胤^{たかがわしきひろ}の申し出により、明治4年（1871）に撮影された。この門は、本丸への大名登城路で、門の周辺には百人番所や大番所などがあり、本丸護衛の重要地点であった。



東京御著輦（『明治天皇紀附図』）宮内庁蔵

明治元年（1868）10月13日に明治天皇が旧江戸城に入城する場面。臨時帝室編修局の委嘱により二世五姓田芳柳が描いた81枚の水彩画のうちの1枚（昭和6～8年）〈1931～33〉。

Ⅲ. 明治政府による東京再編

明治元年（1868）、明治天皇は江戸城（東京城）に入城しました。一旦京都に戻った後、翌年再び東京城に入り、これをもって東京遷都となりました（遷都に関する正式な詔書が出されていないため「東京奠都」といわれます）。天皇の東幸にあたっては3,300人あまりの人々が護衛を務めたといわれ、その道中行列は多くの錦絵にも描かれました。

明治政府を支えたのは、薩摩・長州を筆頭に明治維新を主導した西国大名家の家臣たちでした。またそれに加え、海外留学の経験があり政治運営に長けた旧幕臣も登用されました。勝海舟や榎本武揚、渋沢栄一をはじめとして、多くの旧幕臣が明治初期の政府を支えました。

明治政府は、幕末に締結した不平等条約の改正を目指し、欧米列強と対等となるため西洋文化を取り入れた街づくりを実践しました。幕末に開港地となった横浜と築地には外国人居留地が置かれ、築地に近い新橋と横浜を結ぶ鉄道が明治5年（1872）に建設されました。同年の火災で焼失した銀座の街は西欧風の煉瓦街として生まれ変わりました。また市内の木橋は石橋へ架け替えられ、旧江戸城の城門は撤廃され、西欧建築が次々に建設されていきます。

明治3年（1870）から発行された英字新聞『ザ・ファー・イースト』には明治維新直後の風景が鮮明な写真によって紹介されており、江戸城や大名屋敷など江戸の都市風景の最後の姿が記録されています。



外務省



大審院



近衛歩兵第一連隊兵舎（竹橋兵営）

（日本カメラ博物館蔵）

IV. 新たな時代の幕開け

文明開化は衣食住にとどまらず、交通インフラ、郵便制度、建築、教育、出版に至るまであらゆる範囲に及びました。

条約改正に向けて西洋化をアピールするための鹿鳴館建設、近代国家として重要な内閣制度創設および大日本帝国憲法制定などが相次ぎました。



河鍋暁斎画祭礼幕「舞楽 蘭陵王図」（麹町三丁目町会蔵）

明治22年（1889）2月11日の大日本帝国憲法発布を祝うために、麹町町会の依頼で制作された幕。河鍋暁斎の最晩年の作。絵の裏には、大日本帝国憲法発布についての奉祝文が書かれている。

展示では、現在も千代田区に残る幕末・明治維新の痕跡の紹介もしています。展示内容と合わせて、実際に区内を歩き、積み重なった豊かな歴史を体感してみたいはいかがでしょうか。

（長谷川 怜）



東都名勝図会 鹿鳴館（個人蔵）

東京の観光名所を描いた石版画シリーズの1枚。発行は明治26年（1893）である。すでにこの時、鹿鳴館は役目を終え、建物は華族会館に払い下げられており、また改修によって屋根の形状も変わっているはずだが、ありし日の鹿鳴館の姿で描かれている。



憲法発布之図

楊洲周延画による大日本帝国憲法発布の錦絵である。明治宮殿の正殿において陸軍装束の明治天皇が、時の内閣総理大臣である黒田清隆に憲法を与えている場面。

《関連講座》

①：江戸城無血開城—篤姫と和宮が果たした役割

日時：平成30年10月30日（火）午後7時～午後8時30分（開場午後6時30分）
講師：田中潤氏（徳川記念財団特別研究員）

②：幕末維新の目撃者—外国人からみた日本の近代化

日時：平成30年11月13日（火）午後7時～午後8時30分（開場午後6時30分）
講師：吉良芳恵氏（日本女子大学名誉教授・千代田区文化財保護審議会委員）

③：写真のなかの江戸

日時：平成30年11月27日（火）午後7時～午後8時30分（開場午後6時30分）
講師：金行信輔氏（都市史研究家）

①～③

会場：千代田区立日比谷図書文化館 地下1階 大ホール
参加費：500円 各回定員：180名（事前申し込み順、定員になり次第締め切り）
お申し込みは、ホームページの申し込みフォーム、電話（03-3502-3340）、ご来館（1階受付）のいずれかにて。
HP <https://www.library.chiyoda.tokyo.jp/hibiya/>

④ 明治時代の千代田をめぐる

日時：平成30年11月30日（金）
午後7時～午後8時30分
（開場午後6時30分）

講師：長谷川怜（文化財事務室学芸員）
会場：日比谷図書文化館4階 小ホール
参加費：500円
定員：60名（抽選／千代田区民優先）
申込締切：11月11日（日）

お申し込みは、往復ハガキ・FAX・電子メールで、
1. 講座名「明治時代の千代田をめぐる」、2. 氏名、
3. 郵便番号・住所、4. 電話番号、5. 年齢を記入の上、11月11日（日）（消印有効）までに日比谷図書文化館文化財事務室へ
住所：〒100-0012 千代田区日比谷公園1-4
☎03-3502-3348、FAX: 03-3502-3361、
電子メール：bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp

共同企画特別展「夢二繚乱」に 3万人を超す方が来場

平成30年（2018）5月19日から7月1日にかけて、千代田区と東京ステーションギャラリーは、千代田区に寄贈された龍星閣コレクションを中心とした「夢二繚乱」展を開催しました。昨年開催した「松江城と江戸城―国宝になった城と天下人の城―」は、千代田区と他の自治体とが連携した初めての共同企画特別展でしたが、今回の「夢二繚乱」は、他の民間団体と連携し開催した初めてのケースです。

区内出版社の龍星閣が竹久夢二（1884-1934）の画集や著作を出版するために収集した美術作品・資料は、肉筆画、挿絵、木版画、絵葉書、装幀本、スクラップブックなど、幅広いジャンルが網羅されています。この龍星閣コレクションの特徴を生かし、「夢二繚乱」展では、美人画の画家という枠に止まらない、文筆家や作詞家、デザイナー、装幀家といった夢二のマルチな活躍ぶりを視覚的に伝える展示をしました。さらに、昭和2年（1927）に、夢二が自らの半生を題材に都新聞（現・東京新聞）で連載した「出帆」の挿絵原画を年譜に組み込んで展示し、波乱に富んだ夢二の人生を原画とともに語りました。本展では「夢二と出版」をテーマとして、出版と深い関わりを持っていた夢二の多彩で豊かな創作活動と、千代田区の出版文化について紹介しました。



本展は新聞、テレビ、雑誌、ウェブサイトなど各種メディアでも取り上げられ、39日間の会期中に会場の東京ステーションギャラリーに多くの千代田区民の方をはじめ遠方からも計34,963名のお客様にお越しいただきました。

■関連事業

会期中に下記の関連イベントを行いました。

- ・ 関連講座 4回
- ・ 昼休みコンサート 1回
- ・ 千代田区民向けの展示解説 6回
- ・ 開館時間中の展示解説 2回
- ・ 親子見学会 1回

各回とも多くの方々にご参加いただき大変盛況でした。

■千代田区民入館券の配布

東京ステーションギャラリーへの入館料は、千代田区在住者は無料とし、区内各出張所や千代田区文化振興課（区役所6階）、日比谷図書文化館文化財事務室の窓口にて、千代田区民入館券を配布しました。会期中、区民入館券は1,668枚のご利用がありました。

■展覧会図録の販売

今回の「夢二繚乱」展では、千代田区に寄贈された龍星閣コレクションのうち、竹久夢二が制作した美術作品を中心に展示しました。「夢二繚乱」展の出品作や内容を掲載した図録は、千代田区立日比谷図書文化館1階のショップにて販売しています。

判型、頁数：A5判、419ページ
価格：2,592円（税込み）

郵送をご希望の方は、

図録2,592円＋郵送料510円（※レターパックプラスでの発送です）＝3,102円の価格となります。

「夢二繚乱」展図録の購入希望を明記の上、定額小為替3,100円と2円切手を同封し、

〒100-0012 千代田区日比谷公園1-4 日比谷図書文化館文化財事務室までお送りください。

関連講座・イベント

■5月31日（木）

「ジャーナリズムと竹久夢二」

講師：西山純子氏（千葉市美術館学芸員）

明治時代後半に盛んに出版された雑誌というメディアが読者や画家を志す若者にとって、会話の場や表現を共有する場であったことを当時の雑誌記事などから紐解きました。新聞や雑誌への投稿からデビューした竹久夢二は、自分の私生活や心情を描くことに徹する新しい表現を打ち出し、また自己演出やプロデュースの大切さに早くから気付いていました。晩年に翻弄された部分がありつつも、夢二は自身の多才さを出版やジャーナリズムで発揮したことを生き生きと明らかにしました。



■6月5日（火）

「出版活動と千代田、龍星閣コレクション」

講師：井上海（文化財事務室学芸員）

聞き手：富田章氏（東京ステーションギャラリー館長）

千代田区と東京ステーションギャラリーが「夢二繚乱」展を共同で開催することになった経緯や、夢二の画集や著作を出版するために収集された龍星閣コレクションの特徴について担当学芸員が対談しました。本展で初公開となった画文集『揺籃』の調査成果、《出帆》と夢二の年譜を組み込んだ展示方法、夢二と龍星閣の出版活動を詳しく解説し、展覧会をさらに楽しむことができる内容となりました。



■6月14日（木）

「夢二の描いた大正時代・名曲集」・昼休みコンサート

夢二は数多くの楽譜の表紙を描いています。昼休みコンサートでは夢二が手がけた楽譜に収録された楽曲

の公演を行いました。その後、担当学芸員が講演を行い、夢二が表紙を描いた主な楽譜として、セノオ楽譜、新小唄、中山晋平作曲全集、金の星童謡曲譜、令女界附録楽譜について取り上げました。楽譜の表紙だけでなく、譜面や奥付の画像を見せながら、夢二のデザインの特色や近代の日本における楽譜の展開などを踏まえ、大正時代の楽譜の受容について説明しました。



新原輝美さん（フルート）、
杉原蓮子さん（バイオリン）、
千葉舞子さん（ピアノ）

■6月21日（木）

「装幀・出版からみた竹久夢二」

講師：岩切信一郎氏（美術史家）

夢二が手がけた本のデザインという表面的な問題だけでなく、本の用途や判型、綴じ方、印刷技術といった観点から、夢二を取り巻く江戸、明治、大正時代の造本の歴史についても踏み込み、大変盛り沢山な内容を楽しく解説しました。実際の資料を見せながら、明治から大正時代にかけての出版事情や、夢二のデビュー作である『夢二画集』が自身のコマ絵の版木をかき集めて作成された経緯など、木版印刷と夢二の関わりについても触れて、夢二が木版文化の復興に一役買っていたことを紹介しました。



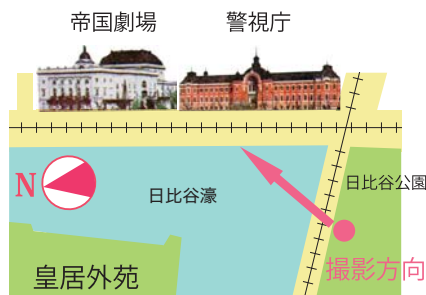
■千代田区民向けの展示解説

東京ステーションギャラリーの開館前に、千代田区町会などの団体に担当学芸員が展覧会の見どころを解説しました。





左の白い建物が帝国劇場、右が警視庁。画面中央部の道路（現在の日比谷通り）には東京市電が7、8輛連なっている様子が写っています。



白亜の洋館と、ドームのある煉瓦造りの建築が並んで建っています。まるで西欧の街並みのようですが、これは大正時代の千代田区（旧麹町区）有楽町付近です。

撮影者は、渡部亀太郎氏。北海道から写真家になるため上京し写真学校で学びました。大正11年（1922）頃に北海道へ帰郷して写真店を開業しましたが、翌年、病気のために亡くなりました。若き写真家が撮影したこの写真は、平成30年（2018）に千代田区教育委員会に寄贈されました。

画面左が明治44年（1911）に竣工したルネサンス様式の帝国劇場です。西欧から招かれた音楽家たちもここで演奏しました。建物は新しくりましたが、帝劇は現在も同じ場

所にあります。

右に建つのは同年竣工の警視庁です。大正12年（1923）の関東大震災で被災し、桜田門前に移転しました。その後、警視庁のあった場所には第一生命館（現在のDNタワー21）が建てられました。

写真の撮影時期は定かではありませんが、撮影者の履歴や、中央に写りこんでいる市電の形状などから大正10年（1921）頃のものだと推定されます。街路樹が落葉しているため季節は秋から冬でしょう。

市電が連なる様子、舗装されていない車道、電柱の形状など、当時の街の雰囲気が伝わります。

（長谷川 怜）



都営地下鉄 ●三田線—「内幸町駅」徒歩3分
東京メトロ ●千代田線
●日比谷線 } 「霞ヶ関駅」徒歩5分
●丸ノ内線

駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 午前10:00～午後10:00
土 午前10:00～午後 7:00
日・祝 午前10:00～午後 5:00
文化財事務局 月～金 午前10:00～午後 6:00
※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。
休 館 日 毎月第3月曜日
年末年始(12月29日～1月3日)
特別整理期間

文化財ニュース 第16号 (2,000部)

発行日 平成30年9月28日

編集・発行 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務局
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
HP: <http://edo-chiyoda.jp/>
e-mail: bunkashinkou@city.chiyoda.lg.jp

印刷 株式会社 報 光 社